

日本園芸療法学会 2021 大会プレ大会 報告

JHTA 2021 Pre Web meeting report

石神洋一・石神裕美子
日本園芸療法学会 2021 大会 大会長
特定非営利活動法人たかつき

《プレ大会に至った経緯》

2019年の日本園芸療法学会大会時に2020年度大会の大会長の大役を拝命。「参加型の大会を目指してがんばるぞ」と会場や懇親会場を予約し、見学プログラムや交流型のワークショップの企画などを進め、いろいろな方に直接会いに行きアドバイスをしてもらっていた2020年当初、新型コロナウイルスの脅威が急速に襲いかかってきました。

国内での感染拡大や緊急事態宣言を受け、実行委員会では大会を延期することを決定。5月末にはその代替としてオンライン形式でプレ大会を開催することに決定しました。

《プレ大会の目的と趣旨、大会を通して実現したかったこと》

開催予定だった本大会は園芸療法の未来について語り合うシンポジウム「園芸療法未来会議」をメインプログラムと考えていました。園芸療法未来会議は日本を7ブロックに分けて、ブロック代表者を決め、数回の「地域ブロック会議」を開催、そこで話し合われた内容をまとめ、シンポジウムにおいて議論するというプログラムでした。

そこで、これらの企画を消さないために、11月に2021年大会の「プレ大会」の位置づけで「園芸療法未来会議」の報告会をすることに決定しました。

《地域ブロック会議》

代表者との事前の打ち合わせを4月から始め、大会の趣旨や園芸療法未来会議の目的を伝えました。ブロック代表者は「園芸療法の将来のために役立つのなら」と協力を快諾してくれました。会議の方針の1つ目は、参加者同士がお互いの現状を把握し、地域の園芸療法の実情が共有できるものにするということです。2つ目は、「自分たちはどうしていくのか」という主体的な話し合いにすることです。参加者自身が園芸療法の未来を作っていくという意識で参加することを共有しました。

以下は地域ブロック会議での経緯です。

《北海道ブロック》

ブロック代表は剣持卓也さん。4回の会議を開催。

32人が参加。病院、大学での教育、障害者分野、高齢者施設、森林療法とのミックスなど参加者の人数よりも取り組みの種類が多いという開拓者精神にあふれた勢いのあるブロックです。

《東北・北関東ブロック》

ブロック代表は毛利ユカさん。6回の会議を開催。32人が参加。もともと地域で組織されていた園芸療法のいくつかの団体が参加しています。たくさんの意見を集約できる毛利さんの包容力もあり、まとまりのあるブロックです。

《関東ブロック》

ブロック代表は小濱絵美さん。3回の会議を開催。16人が参加。コロナ禍の影響を一番大きく受けている地域。高齢者施設で仕事をしている方や、長く畑を活用した園芸福祉活動を続けてこられた方も参加。コロナ感染者が出ている施設の中での仕事の様子など、興味深い議論がたくさんありました。

《中部北陸ブロック》

ブロック代表は萩原新さん。4回の会議を開催。35人が参加。医療現場で園芸療法をしている方や、大学などで教育に携わる方、水耕栽培機器の製造をしている方、園芸療法からは離れているけれどまたやってみたくて熱意を持っている方などバラエティに富んだブロックです。代表の萩原さんを中心に温かい包み込まれるような雰囲気が特徴です。

《関西ブロック》

ブロック代表は田崎史江さん。4回の会議を開催。67人が参加。参加者が一番多いブロックです。地元で長く活動している園芸療法研究会西日本からの参加者も多く、関西らしく活気あふれる会議が続きます。

《中国四国ブロック》

ブロック代表は丸山恵利加さん。4回の会議を開催。28人が参加。いつも穏やかな会議の流れの中で、お互いのつながりをとても大切にされています。実際にお互いの活動場所を訪問し合うこともあったようです。つながることが普段の仕事のモチベーションアップにつながるとお話をされていたのが印象的でした。

ておられますが、自宅周りの庭や近くにある畑ではほぼ毎日農園芸作業をしています。

お母さんが自分でできることはできるだけ自分で続けてもらい、どうしてもできないところ・できなさそうなところだけを、“それとわからないように”手伝うのが尾崎さんの支援スタイルです。70鉢のゼラニウム栽培、20株のアジサイの手入れ、畑、クリ林、シイタケ栽培など「畑の野菜の出来は、畑に足を運んだだけのものじゃけ～」と、自分のやり方に強いこだわりを持つお母さんのプライドを尊重しつつフォローしているそうです。コロナ禍においても、いつも通り農園芸で十分に体と頭を使い、まったく生活に変化はなかったそうです。自宅での見守りを行った効果です。

尾崎さんは発表を依頼した時、一旦断られました。お母さんの支援は対象者が1人の取り組みの上に、家族を対象としたことなので、園芸療法として学会で発表するにはふさわしくないと考えていたそうです。しかし、地域ブロック代表者の中では、尾崎さんの事例こそ園芸療法の本質を表したものなのではないか、こういう事例が全国の仲間を勇気づけるのではないかと推薦する声が多くありました。また介護の専門家からは、認知症介護の理想の形であるという推薦もありました。再度尾崎さんの背中を押し、発表が実現しました。

この2つの事例は、目の前の対象者を大切に、少しでも良くなってもらいたいと思いつつ支援する園芸療法の大切にすべき考え方が表れています。アンケート結果では、事例発表がもっとも満足度が高いプログラムでした。参加者の共感が得られたことがよくわかります。

《グループセッション》

グループセッションは、今までの大会にはないオンラインならではの取り組みで、参加型大会を目指すプログラムの中では非常に有意義なものとなりました。

グループセッションを企画した背景には、各地で園芸療法に取り組む参加者から、「いろいろなことに取り組んでいて発信はしたい。だけど大会において自分から発信をする機会がない。もっとたくさんの人と情報交換がしたい。」という意見が多く聞かれました。

孤軍奮闘している実践者たちが、不安を抱え、同じ気持ちで実践している人たちが多くいることがわかり、お互いに勇気を得ることができると考えたのです。グループ分けは、同じ分野で活動する人同士が集まるように設定しました。

グループセッションでは、①自己紹介・活動紹介、②コロナ禍での園芸療法、③第2部の事例発表についての意見交換を行いました。グループあたり5人程度で22のグループでセッションを開始。各グループはファシリテーターが進行とまとめ役を担いました。直前の連絡にもかかわらずファシリテーターを快く引き受けてくださった全国の同志のみなさん、ご協力ありがとうございました。

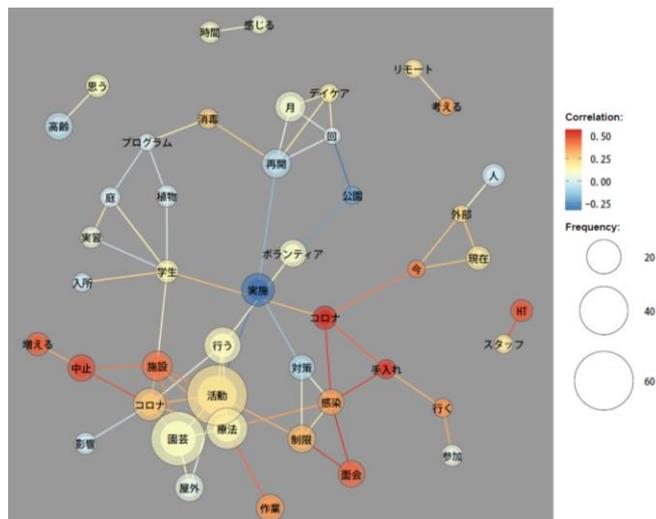
グループセッションは予想していた以上に活発に意見交換が行われ、盛り上がりました。終了後の感想は「時間が足りなかった」「もっと話したかった」という意見をいただきました。

【グループセッションで出た意見（抜粋）】

コロナ禍における園芸療法の取り組みについて	<ul style="list-style-type: none">・他のレクリエーションが出来ない中、園芸活動だけが再開された。その影響として、園芸活動が人気となり、会場の設定や定員を決めて入れ替え制または2回に分けて行うなど工夫をしている・老健にて実施。特に変わったことなくできている。飲食もしている。疲れているのは職員も同じで、スタッフルームの各職員のテーブルに観葉植物をおいて気分転換している（効果について現在研究中）・you tube やニュースレターで普及活動をしている。・活動を登録している人はできているが、ボランティアなどの外部の人は再開できていない・活動再開後の利用者さんを見てみると認知機能が低下しているようにうかがえた・園芸療法のプログラムは変わらない。作業療法士さんからは散歩が増えたりして、庭があつて良かったとの声が上がっている・高齢者施設でHTが中止。利用者さんのHTへの関心が薄れるから各利用者様へ手書きの手紙（押し花やハーブを挟んで）を週1回、スタッフに手渡してもらった。利用者様以上にスタッフが感激してくれた・誰のためにHTを行っていたのか？に気がつかされた。対象者あつてのHTだと心から思った
-----------------------	---

<p>第 2 部の発表 についての感想・意見</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「コロナ禍だから仕方がない」ではなく、それぞれの地域で皆さんがそれぞれ前へ踏み出す取り組みを工夫していることを知って力をもらった。そのような機会があったことはありがたく、このようなつながりを大切にしていきたい ・園芸療法士や医師ではない方々からの根源的な発表には感動した <p>【福田さんの発表について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「働く意欲は働くことから」という言葉は本当に共感 ・雇用によって公園での作業が続けていけたことは当事者の方の意欲をつなぎ、やりがいを持って仕事に励むことに繋がったのだと思う ・自立の手段として雇用につなげることの重要性を感じた。すばらしい取り組みだと思った <p>【尾崎さんの発表について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢の祖母がいるので共感した ・一番身近な人に対して（園芸療法を）使っていて感動した ・必要なことがつまっていると感じた ・人類愛を感じた ・認知症高齢者の人に対して、大事な部分が配慮された関わり方をされていた。個人に向き合い尊重した関わり方だった ・園芸療法対象者を認知症高齢者、その家族に焦点をあて活動しています。また、父・母が認知症であり介護3と4で、両親向けに農的活動を進め行っていました。尾崎さんの言葉一つ一つが私の中で染み渡り、うなずき、心が熱くなりました
--------------------------------	--

グループセッション「コロナ禍における園芸療法の取り組み」で話し合われたことはK h コーダーの共起ネットワークに表示（相関）しました。なお円の大きさは発言回数を示し、赤色は正の相関、青色は負の相関を示しています。



参加者によると、「園芸療法の実施はコロナによって影響を受けたところが多い」「施設活動もコロナによって中止となったところが多い」「コロナの感染予防による、面会制限などが増加した」「ボランティアの実施は減少している」などが抽出されました。

《総評》

プレ大会の最後に、JA 共済総合研究所 調査研究部 主席研究員で、日本農福連携協会顧問も務められている濱田先生に総評をいただきました。

プレ大会全体を福祉マインドのアウトホームで温かな雰囲気での会であったと評価がありました。

現状の園芸療法士の孤独感や知名度のなさ、資金調達に苦勞をしているなどの話にも触れ、今後の園芸療法活動を広く普及させる道筋として、国が推進している活動(例えば農福連携)との連携を作っていくことの重要性や、実践事例と効果を積み重ね、研究者と実践者が両輪となって園芸療法を広げていくことの重要性をお話いただきました。

濱田先生に総評をしていただいたことは参加者にとっても大きな刺激になっていたようです。「違う視点から園芸療法の可能性を示唆していただき、希望を持つことができた」という感想もいただきました。

濱田先生には 2021 大会において講演をしていただくことになっています。園芸療法と農福連携につながる機会になることを期待します。

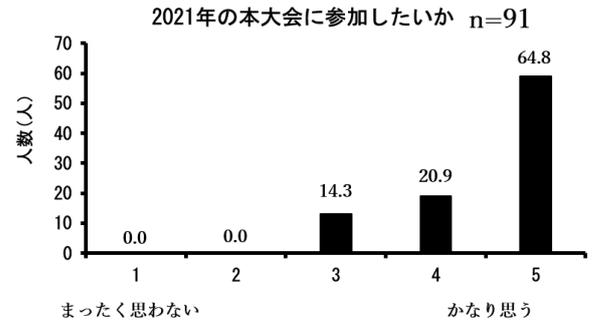
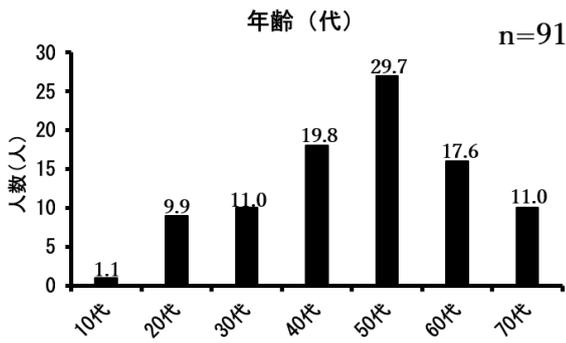
《アンケート結果》

大会終了後すぐに九州沖縄ブロック代表者（菊川裕幸）が作成してくれたアンケートをオンラインで実施しました。

参加者 141 名のうち 91 名から回答を得ることができました。

主な項目についてご報告いたします。

アンケート回答者の年齢 等



《今後の動き》

2021年度の大会は、引き続き大阪高槻大会開催で準備を進めています。日程は12月4-5日(土日)です(※プレ大会で発表した11月開催から予定が変更になりました)。

大会での園芸療法未来会議シンポジウムに向けて、全国7つの地域ブロックでは「地域ブロック会議」がすでに始まっています。北海道では昨年より参加者数が増え、他地域から講師を呼んで勉強会を開いています。中部北陸ブロックでは園芸療法に関する文献を使った勉強会を企画中です。関西ブロックでは園芸療法と他の分野をつなぐ「園芸療法×○○」という企画があり、3月28日には「園芸療法×作業療法」イベントがZoom形式で開催されました。園芸療法士、作業療法士を中心に全国から86名の参加者があり、大変盛り上がりました。

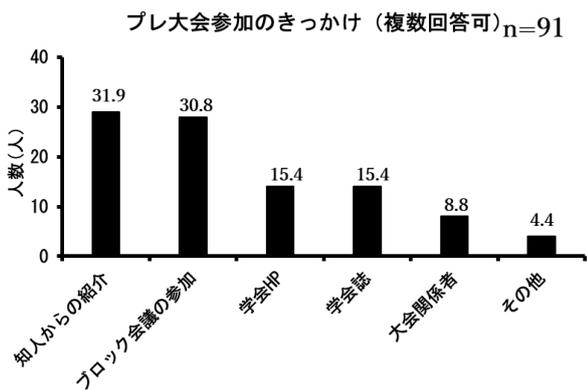
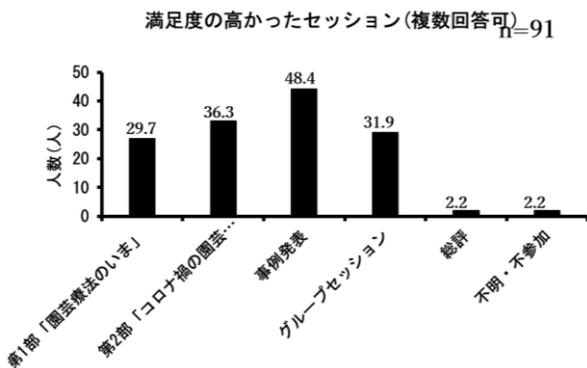
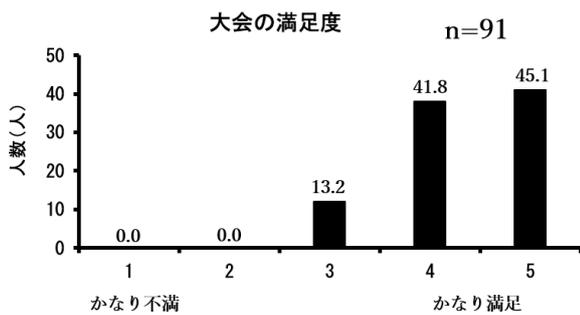
2021大会に向けての本格的な活動は7月ごろから各地ではじまる予定ですが、新しいメンバーも加わって各地で情報共有のための地域ブロック会議が活発に開催されています。園芸療法未来会議にぜひご参加ください。

《最後に》

学会の大会長をするということは、私たちにとって初めての経験でした。学会理事の方々や、園芸療法の仲間を支えられて無事プレ大会を終了することができました。感謝申し上げます。

また昨年12月にこの世を去られたグロッセ世津子さんには、大会の方向性や運営で大切にすべきことについてたくさんのアドバイスをいただきました。

グロッセさんは、各地でがんばっている実践者たちがつながり、そこに光が当たることを望んでおられました。プレ大会が参加型の大会となり、参加者同士の心のつながりが持てたことを喜んでくださっていると思います。



2021年大会も園芸療法を志す人たちが勇気をもって帰れるような、明るい未来志向の大会にしたいと思います。会員の皆様のご協力よろしく申し上げます。



大会マスコット 葉っぱの葉ちゃん